

優秀賞

夫婦愛

東京都学習院女子高等科二年 田中 頌子

「腎不全という病気で、もう人工透析をするか、腎臓移植を受けるしかないのよ。」

祖母が言った。二年位前から祖母の腎臓の数値が悪いと両親が話しているのを聞いてはいたが、そんなに悪くなっているなんてショックだった。

「先日、診察を待合室で待っている時に同じ年齢位のご夫婦が声をかけてきて下さって『私達は夫婦間で腎臓移植をして今ではすっかり良くなり腎臓が悪くなる前と同じように生活して旅行も自由に行けているんですよ。』ってお話してくれたの。私は元氣なじいじの身体を切って腎臓を貰うなんて考えられなかったのだけど、じいじが『ドクターに話を聞くだけでも。』って言うってくれて聞きに行ったら、血液型の違う人同士でも今は移植できて夫婦間での腎臓移植が半数なんですよ。年齢的にも腎臓の数値的にも今がタイムリミットで、じいじが悪いところがなく健康でないドナーにはなれないから検査の結果次第でもあるんだけどね。」

私が生まれてからずっと健康でいつも笑って見守ってくれていた祖母が急に歳をとったように感じた。元気で居てくれることが当たり前に感じていたことに後悔し、ただジッと話を聞くことしかできなかった。

数週間が経ち祖母が「じいじの身体は悪いところがなくドナーになれるって結果が出てじいじはもうすっかりドナーになる気満々になってくれているの。でも私はもう後何年、生きられるか分からないこの身体の為に健康なじいじの身体を傷つけてまで生きていいのかしら。それで逆にじいじの方が具合が悪くなったらいけないし。決められないわ。」

と言った。

そのつい何日前に祖父が父に

「今まで、ばあばにはお世話になるばかりだったから今回はばあばに恩返ししようと思う。」
と話しているのを聞いた。いつも冗談ばかり言って笑わせてくれる祖父が真剣に祖母への感謝の気持ちを持って

命をかけて祖母を守ろうと決心して話している姿にジンときた。世の中のどれくらい割合の夫婦がこうしてお互いを思いやり危機に直面した時に自分を犠牲にしてまで相手を守ろうとするだろう。結婚して五十年経てば皆そうなるのだろうか。いや、年数ではない気がする。祖父の愛情の深さに感動した瞬間だった。

「じいじにもばあばにも一緒に長生きして欲しい。」

私は祖母に、ただそれだけしか言えなかった。

腎臓移植の話は進み、二か月後に手術日が決まった。元氣そうだった祖母もこの二か月であつという間に体調が悪くなり、動悸がしたり食欲が無くなったりして手術日が待ち遠しかった。

しかし、入院前日、氣丈に振舞っていた祖父が夕食の帰りに転倒しメガネが壊れちよつとした怪我をした。不安が伝わってきて可哀想だった。「じいじ頑張れ！」私は心の中で叫んだ。

手術は午後一時から始まった。父と母が六時間以上かかる手術に付き添った。予定通り三時間ちよつとで腎臓摘出された祖父がベッドに戻ってきてまず第一声が「ばあばは大丈夫か？あの子は我慢するから」だったそうだ。自分も全身麻酔が覚めたばかりで大変な手術だったのに祖母のことを心配していた祖父の愛情の深さにまた感動した。

午後八時、祖母の手術も終わりドクターが両親に話し



に来た。

「アレルギー反応が出てしまい、明朝まで麻酔を解けません。」

両親は祖父にその状態を話すと心配をすと思ひ、

「無事に手術終わったよ。」

とだけ伝え帰宅して来た。明朝、父が祖母に会いに行く

と祖母はもう目覚めていて

「手術は夜八時頃に終わると聞いていたのに目が覚めた
ら外が明るいから、おかしいなと思っていたのよ。大
変だったのね。全然知らなかったわ。心配かけてゴメ
ンね。ありがとう。」

と言ったそうだ。

それから退院までは祖母の方が早く元気になろうと術
後三日目にして院内を歩いていた。痛みに弱い祖父は

「地獄との戦いだ。」

と言いながらベッドに居る時間が長かった。祖母はそん
な祖父を売店などに連れ出し一生懸命元気づけようとし
ていた。お見舞いに行くといつもベッドに居なくて看護
師さんに聞くと

「私達も探しているんですよ。」

と二人で仲良く院内を散歩しているようだった。

二週間の入院生活を終え、ゆっくりと以前と変わらな
い生活が戻ってきた。手術後四か月が経った今、祖父母
はすっかり元気になり来週は私と一緒に旅行に行く。ま

たいつもの元気な祖母の笑顔が見られ、祖父の冗談が聞
けると思うと楽しみだ。

こうして私は、祖父母の愛情の深さに感動し、家族み
んなが健康であることに感謝し、いつか祖父母のように、
楽しい時には一緒に笑い、苦しい時には一緒に乗り越え
られる、お互いを思いやれる人と出逢えたらいいな、と
思ったのだった。